

金沢大学英文学会 *The Society of English Literature, Kanazawa University*

NO. 7 *NewsLetter*

2015.11.01

★金沢大学英文学会は、1953年1月第1回卒業生の予餞会で結成。年1回総会と講演会・研究発表会を開催、学会誌 *KES* は1954年創刊、現在28号を数える。

会員のみなさま、お変わりございませんか。NewsLetter 第7号をお届けします。本年度の運営委員会がさる10月10日に開催され、本号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

=====

反射と無私と再帰代名詞

中村 芳久

小さい頃、チャンバラをよくやった。映画やテレビの時代劇の立ち回りの子ども遊びだ。時代劇では、いつも「悪かやつ」（悪役）が先に刀を抜いて仕掛けてくる。そこを「よかやつ」（正義の味方）がやおら刀を抜いて成敗する。「よかやつ」を演じたいぼくらは、だれも先に刀を抜こうとしないから、チャンバラがなかなか始まらない。とうとう「おまえ先に抜けよ」という声がかかったりした。

黒澤監督の映画でも、相手が刀を抜いて切りかかる瞬間に、椿三十郎は刀を抜いて相手の胴を切り抜いた。このようなシーンをみているうちに、「こんなはずはない。主役が後から剣を抜くのは監督の演出だろう」という気がしてきた。その後流行った西部劇のジョン・ウェインも、『拳銃無宿』のステューブ・マックイーンも、保安官ワイアット・アープも、『続荒野の用心棒』の名優フランコ・ネロも、先に銃を抜くことなく、決して負けない。かっこよすぎる。監督の「後

抜き演出」は、確信にかわった。

ところが、である。1920～30年代、あの量子論の産みの親ニールス・ボーアは、その頃の西部劇の愛好家だったらしく、正義の味方の「後抜き」が、演出などではなく理論的に正しいことを見抜いていたらしい（Norretranders, *The User Illusion*, Penguin, 255-6）。先に撃つ悪漢の方はいつ撃つかを決めなくてはならない。これが悪漢の動きを鈍らせる。一方正義の味方は悪漢の手がピクッと動くのをみて、反射的に動き、まったく無意識に銃を抜く。だから早い。この理論に異を唱えるコペンハーゲンの理論物理学研究所の研究者たちが、オモチャの拳銃を買ってきて決闘を挑んだところ、みんな、正義の味方を演じるニールス・ボーアに「射殺」されたらしい。Norretrandersによると、無意識の処理能力は1100万ビット/秒、意識のそれは十数ビット/秒、前者は後者の100万倍の早さなのだから、うかつに頭を使うと命取りになる。武芸の達人は、私を無にして、無心にことに臨む極意を会得していたのだろう。

鈴木大拙の *Zen and Japanese Culture* (1937) には“Zen and the Samurai”や“Zen and Swordsmanship”の章があって、反射的所作や直観的思考（直覚）が深く説かれていている。（e.g. “...intuition is the more direct way of reaching the Truth”, ch.3）。興味深いのは、鈴木大拙のテキストに再帰代名詞の用法が目につくことだ。kill oneself や stab oneself のような、ふつうの用法なら自分に対する意図的な行為を表すが、大拙のテキストでは、同種の用法が「なる」的な自発的意味で使われることが多い。

manifest itself や lend itself などに見慣れているが、drown oneself, spread itself, express itself, busy oneself, unify oneself, efface itself, expose itself, relate oneself, divide itself, prostrate itself, work itself to its fullest capacity と用例がつづく。

おそらく、「する」的性質の強い英語で、自然に「なる」のを待つ禅の精神を説こうとすると、「他動詞+再帰代名詞」構文の自発用法を多用することになったのだろう。“Have no thought, no deliberation, no discrimination, and the mind *works itself* to its full capacity” (考えず、思い煩わず、分別を捨てれば、心は自然に働いて最大の力を発揮する) という *works itself* を用いた表現 (ch.4) などは禅の精神そのものである。He warmed himself. は「体を動かして体を温めた」から「体が自然に温まった」のように自然な状態変化を表すようになるのだが、あたかも「する」的で意図性の強い言語自体が、無私の重要性をさとって、この形式の「なる」的用法を発達させたようで面白い。

=====

**2015 年度金沢大学英文学会
総会プログラム**

日時：2015 年 11 月 28 日 (土)

第 1 部 9:30～12:10

第 2 部 13:30～17:30

会場：金沢歌劇座 (大練習室)

〒920-0993 金沢市下本多町 6 番丁 27

(金沢 21 世紀美術館近く)

(TEL: 076-220-2501)

**総会第 1 部 研究発表会
(9:30～12:10)**

9:30～10:00 藤井 志帆 (M2)
「up/down における意味拡張」

10:00～10:30 山田 美紀 (M2)
「did you ever 疑問文の傾向」

10:30～11:00 長谷川 あおい (M2)
「英語法助動詞の「可能性」用法についての考察」

11:00～11:10 休憩

11:10～11:40 村澤 佑介 (M2)
「ワーズワースと死の否認」

11:40～12:10 茶谷 丹午 (M2)
「ラフカディオ・ハーンにおける倫理性と怪奇趣味の関連について」



総会第 2 部 (13:30～17:30)

13:30～14:00

開会の辞

- 総会
1. 会計報告
 2. 会の活動報告
 3. その他

14:00～14:40

在学生による留学報告
(4 年生 根岸加奈さん他)

14:40～15:20

「英文科、KES の思い出」

黒川 顕成

(高岡法科大学、S60 年修了)

15:20～15:30 休憩



15:30～17:30 シンポジウム

「英文科のこれから」

パネリスト：

小林 隆 (D3, 石川高等専門学校助教)

長岡 亜生 (福井県立大学准教授)

特別参加：山崎 光悦 金沢大学長

17:30 閉会の辞



18:30～20:30 懇親会

会場：あんやと 金沢店

〒920-0981 金沢市片町 2-21-35
エルビルイースト 1F
(TEL: 050-5828-2465)

会費：5,000 円



《昨年度 KES 総会講演》

★私の英文学漂流—言い残したこと

岡野 浩史 (S60 年院修了)

昨年の KES 総会で、会長の中村先生の御厚意により、「私の英文学漂流」と題して、少しお話しをさせていただきました。私が英文学の徒としてどのような本をどのように読んできたかということをやや駆け足気味でお話しをしたのですが、そのときに、時間が足りなくなってしまう、お話しできなかったことを以下に記します。

さて、皆さんはドクサということばをお聞きになったことがおありかと思います。ギリシャ語です。私たちはドクサの塊であるというのが、かのソクラテスの

立場ですね。根拠のない、主観的で勝手な誤った思い込み、それをドクサと呼びます。そのドクサから解き放って、正しい認識へと至らせる——そのための方法がソクラテスにとっては問答法だったわけです。考えてみますと、私たちは皆、ドクサまみれと言っていていいかと思います。自分のことなど考えてみますと、じつに独断と偏見の塊であり、ソクラテスに遭ったらコテンパンにやられそうです。しかし、私たちにとって、このドクサから自由になるというのはなかなかむずかしいのではないかという気がします。人は一生、ドクサに囚われて生きていくのではないのでしょうか。このドクサの問題をもう少し普遍化し深化してアレゴリー (allegory) という形で見せたのがソクラテスの弟子のプラトンですね。彼は『国家』と題した、哲学者が為政者である理想国を論じた本のなかで、私たちを洞窟の中にとらわれた囚人として描いております。ご存じの方も多いかと思います。私たちは洞窟の中、奥深いところで鎖につながれております。しかも首のところも固定されていて、後ろを振り向くことができず、前にある壁しか見ることができません。私たちの後ろには煌々と火が燃えています。そして私たちの背中とその火の間をいろいろなものが通り過ぎていきます。すると、火が燃えていますので、その通り過ぎていくものの影が私たちの前面にある壁に映し出されます。私たちが見ることのできるものは、その映し出された影だけです。しかし、私たちは、その影しか見ることができませんので、それを本物であり、実体であると思いこんでしまいます。そして、多くの人たちはそのまま人生を生きていく。その影が影であることに気がつかず、影の元となったものがあることも知らず、さらに洞窟の外にはすべての命の源である太陽が輝いていることも知らずに死んでいくのです。しかし、それでいいはずはありません

ん。私たちは目覚め、鎖を解き放ち、虚像を廃し、洞窟の外に出て真理に出会わなくてはなりません。太陽を見なければなりません。今、私が勉強をしていますアイリス・マードック (Iris Murdoch) は、プラトンの描いた、そのような人間の姿を繰り返し、繰り返し小説の中で描いた作家とっていいかと思えます。

マードックは 1919 年にアイルランドのダブリンに生まれ、1999 年になくなりました。彼女は 80 年の生涯で 26 の小説を発表しています。彼女の作品の最大の特徴はその哲学性にあると思います。彼女は小説家ですが、専門の哲学者でもありました。オックスフォードで哲学を教えていました。道徳哲学の大著もあります。プラトンを特に深く読み込んでいて、ソクラテスが主人公の対話による劇、つまり、プラトンとまったく同じ手法で書いた作品もあります。こうお話ししてくるとマードックの小説がとってもむずかしいもので読みにくいものなのではないかと思う方が多いかもしれません。たしかに読みにくいものもありますが、大部分はとても readable です。実際、彼女の小説は 60 年前に出た処女作 *Under the Net* も含めてほとんどが版を重ねて今でも読まれているのです。彼女の小説はほとんどが恋愛小説です。恋愛小説というのは彼女の思想を盛る形式として極めて有利です。恋愛ほど我々が勝手な思い込みや妄想につかまりやすい状況はありません。そして、マードックの恋愛小説は哲学がバックボーンとなっていますが、ふつうの恋愛小説としてふつうの読者にも十分読むことができます。 *Under the Net* などもサルトルの『嘔吐』を強く思い出させ、ウィトゲンシュタインを連想させる人物も登場しますが、主人公が洞窟から抜け出し、真理に気がついて、新たな歩みを始めるまでの経緯を恋愛を軸に描いており、ごくふつうの恋愛小説として読むことができます。学部生の英語

力でも十分楽しめます。

マードックは、そのたくさんの作品の中で、ドクサに捕まった、じつにおびたらしい数の登場人物を描きました。マードックの最大の関心事は、人間いかに生きるべきかということです。これはソクラテスやプラトンなどが常に考えてきたことでした。彼女は 20 世紀に生きる哲学者として、そして小説家として、その問題に取り組みました。私も、人生の黄昏時に入り、頭もだいたい弱くなり、遅すぎるという感もないではないのですが、残された時間、人間いかに生きるべきかという問題をマードックの作品を読みながら、私なりに考えていきたいと思っています。

《近況、思い出》

★ボストン 2 カ月・パリ 10 カ月滞在記

里見 繁美 (S57 年院修了)

2014 年度は、本務校より在外研究を認められて、海外の 2 都市に行ってきました。目的はアメリカの作家ヘンリー・ジェイムズ研究です。まず、よく聞かれた質問は、「アメリカの作家の研究なのになぜパリなのですか」ということでした。10 人いれば 9 人は聞いてきました。その質問は、いかにジェイムズという人物を知らないかということを表しています。京都大学のジェイムズ研究家でさえ、同じ質問をしてきたので、驚きました。実はジェイムズとパリとは密接な関係にあるのです。にもかかわらず、このような質問が来るのです。英米の研究者であれば英米に留学するもの、という紋切型の判断があるのかもしれませんがね。いずれにしても、わたしは標記の計画で行ってきました。

ボストン 2 カ月の滞在中は、ジェイムズおよびジェイムズ家の人たちの足跡を

中心に調査してみました。以前にもしたことです、改めてその足跡を辿ってみましたのです。ボストン大学とハーヴァード大学には大変お世話になりました。幸いにも滞在中にハーヴァード大学の卒業式に列席することができました。ジェイムズももらった名誉博士号ですが、今回の名誉博士号はソウルの女王アレサ・フランクリンや元大統領ブッシュ氏、ジュリアーニ元ニューヨーク市長等に与えられました。ボストンの大学の卒業式というのは日本と違って、多くが野外で行われていました。雨が降っても野外で行われるのでしょね、アメリカらしいと思います。

場所をジェイムズ研究者の多いパリに移して、10カ月間はフランスを堪能しました。ジェイムズが若かりし頃を過ごした住居跡の確認や『アメリカ人』や『使者たち』における主人公のパリでの足跡はもちろんのこと、ロスト・ジェネレーションの作家たちのパリにおける足跡も確認してみました。ヘミングウェイはもちろんのこと、フォークナーやフィッツジェラルド、ガートルード・スタイン、シルビア・ビーチ等、実に多くのことを知ることができました。またパリは美術館・博物館の宝庫です。これらも幾度となく鑑賞しました。実に贅沢な日々だったと思います。それ以外にも、学んだことは数知れません。フランスの人口は6千万人台ですが、観光客の数が年間8千万人ということです。何という国でしょうか。日本人観光客のモンサン・ミッシェル行きはすさまじい数です。パリ滞在10カ月はいろいろな意味ですばらしい成果をもたらしてくれました。

★手帳が埋まってないと気が済まないのね

伊藤 真由美 (H2 年卒)

大学を卒業して26年。自分の子供たちが大学生ですから我ながらびっくりです。昔も今も変わらないのが、予定が詰まっていないと気が済まないことです。大学3回生のときに、同級生に「まーちゃんって手帳が埋まっていないと気が済まないのね」と笑いながら言われました。ちょうど中村先生が金沢大学にいらっしやった年で、私の卒論は文学じゃなくて英語学にしようかな、と思い始めたころ。勉強は一生懸命したし、同じころにやっと興味を持てるようになった合唱団(1、2回生のころは嫌々でした)の活動と、それに必要な資金のためのバイトに明け暮れ、「休み」というものがなかったように思います。

教育実習は3回生の秋に出身中学校でさせていただいたのですが、その学年は学年主任ががっちり締めて(こんな書き方、いいのでしょうか)おられて、非常に楽しく実習を終わらせたことを覚えています。(信じられないことに、あとから赴任した中学校で私が指導教官をしたこともあります。小規模校だったので。)

ところが現実には違っていることが実際に教員採用試験に合格し、気持ちも新たに赴任先の中学校に行って1週間でわかりました。詳しくは書きませんが。「生徒指導が成り立っていないと教科指導は成り立たない」という、教育実習の時の指導教官(例の、学年主任で英語教師)のおっしゃっていたことがいやほどわかりました。

結果として二つの中学校に合計13年在職して退職しました。それからすっかり病院と仲良しで、退職の辞令をもらった時はこの先どうしようか、全然めどが立ちませんでした。その頃は子供たちも小さかったので、まあ、結果的にはずるずるとそのままなのですが。一応、数年前に教員免許の更新はしたのですが、その免許を生かせるめどは立っていません。現場を10年以上離れてしまったら、中

学校・高校の講師であろうと、小学校教諭の友人に誘われた「英語活動の担任補助」もできそうにありません。

大学を卒業してから一般の混声合唱団で活動していますが、子供たちは中学生くらいまで私のことを「昔、音楽の先生をしていた」と思っていたらしいです。子供たちを夫や実家に預けてまで三重県や神戸まで演奏旅行に行ったり、コンクールに出たりしていたのですから仕方ないですね。たぶん、これからも私の手帳は病院と音楽その他で埋まってしまうことでしょう。

★バイリンガル子育ての実際

バラ めぐみ (H17年卒)

縁あって、フランス人と結婚し、2人の娘に恵まれた。結婚後、出会った人々は必ずと言っていいほど、苗字のバラの漢字はどう書くのか尋ねてくる。そして、私の夫がフランス人であることがわかると、質問コーナーが始まる。「どこで出会ったんですか。」「旦那さんは何をしているの。」「帰る予定はあるの。」「家では何語で喋っているの。」「フランス語話せるの。」(大学の第二外国語はフランス語だったけど、可だったような…フランス人と結婚する予定じゃなかったし…)そして、期待に満ちた眼差しで、「子どもは何語を話すの。」と訊かれる。今のところ、彼女たちは日本語(金沢弁)を話している。質問した相手は少し期待はずれのようなうだ。

子どもが生まれてくる前から、私たち夫婦はこの事柄について話し合ってきた。事前に、2人で読めるように英語で書かれたバイリンガル教育の本も買った。日本にいるし、日本語は普通に話せるようになる。夫はフランス語で子どもに伝えたいことが沢山あるから、フランス語をわ

かるようになってほしいと言う。そして、自分たちで勉強して英語も話せるようになるといいね、というのが私たちの希望だ。

日本にいて、フランス語を日常的に話すのは夫だけ。彼は子どもたちが生まれてからずっとフランス語で話しかけている。しかし、日本語の環境の中で、彼女たちが話すのはやはり日本語。夫が言っていることはわかるが、夫がフランス語で尋ねたことに対して日本語で答えている。夫も日本語が少しわかるのでそれでコミュニケーションが成り立っている。彼女たちがフランス語をあまり話さない様子を見て焦る気持ちになることもあったが、今はまだインプットの時期であり、フランス語の絶対量が少ないのだから、気長に待とうと思えるようになった。夫もフランス語を話すことを強制するのではなく、コミュニケーションを楽しんで取ることが大事だと考えている。友達のイタリア人の旦那さんと日本人の奥さんの5歳のお子さんと同じ状況だ。

最近では、4歳になる上の娘が夫の言った冗談に反応し、夫は驚きとても喜んでいて。冗談がわかる理解力がついているので、フランス語の発話が出るのも遠い未来ではないと期待している。私も出来るだけ早く「フランス語話せるの。」の質問に、「日常会話程度は。」と軽く答えられるようになりたいものである。(インプット中です…)

★振り返って、今思うこと

岸 千恵 (H19年卒)

「おはよう。今日の天気はどうかかな?」そう声を掛けてからカーテンを開ける。5月に子供が産まれてから、それが朝の日課になっています。今までの生活からガラッと変わり、慣れない子育てに悪戦苦

闘していますが、子供の成長の早さには驚かされる毎日です。

大学を卒業してから、8年以上が過ぎました。今回、この文章を書くにあたり、改めて大学生活とその後社会人として仕事に明け暮れた日々、結婚し、現在に至るまでの生活を思い返しています。

私が金沢大学の英文科を選択した理由はただ一つ、「英語が好きだから」。高校生の頃、授業の一環で英語の小説を読む機会があり、それをきっかけに、どんどん英語の魅力にはまっていきました。新しい単語や文法を覚える度に、辞書をひかなくても読める文章が増え、それは大学生になってからも、私の英語を学ぶ意欲を掻き立てるものでした。大学三年生の時、卒業論文のテーマは何にしようかと考えた際、私は迷わず英語学を選択しました。授業で学ぶうちに、それまで覚えるだけであった英語の奥深さに触れ、もっと知りたいと強く思うようになったからです。そこから卒業論文を仕上げるまでは、毎日数多くの文献を読み、完成した時には達成感に満たされていたことを今でも思い出します。

卒業後は、日本食を海外にも発信したいという思いで食品メーカーに就職し、研究所での商品開発、海外営業、購買と、様々な経験を積みました。研究所では、理系出身の同僚に囲まれ、元來文系の私にとっては、まるで別の国に来てしまったかのよう。ノート片手にその日覚えたことを必死でメモをする毎日で、精神的にもとても大変ではありましたが、そこでの経験は、その後の海外営業や購買での仕事に大いに役立つものとなりました。念願叶って海外営業部門に配属されてからは、自社の製品がどんどん新しい国に拡まっていくことを肌で感じ、とてもやりがいを感じましたし、購買部門では、それまでの営業の仕事とは正反対に、自社で使うものを仕入れるという立場。自分よりずっと年上の、仕入先メーカーの

営業の方と価格交渉等商談をする日々でしたので、間違いなく、小生意気な女だと思われていたことでしょう(笑)。

思い返せば、学生時代から社会人、そして現在に至るまで、新たなフィールドに立つ度にその新鮮な世界に魅了され、少しでも何かを吸収しようと精一杯学び続けてきました。今は仕事から離れて、育児に没頭する日々。さあ、今日は何をして遊ぼうかな？どんな新しいことが出来るようになって、驚かせてくれるかな？我が子の成長に負けないよう、今度は母親として学び、成長していけたらと思います。

《留学の思い出》

★The Pub Life in Dublin!

藤井 志帆 (M2)

私は2014年9月から2015年4月末まで、金沢大学の派遣留学生としてアイルランドのダブリンシティ大学に留学した。みなさんは「アイルランド」という国にどのようなイメージをお持ちだろうか。KES会員の中には、小説家の小泉八雲や詩人オスカーワイルドなどの文学家を連想できる方もいるだろう。しかし世間のアイルランドの認識度はかなり低いもので、「アイルランドに留学しました！」と言うと大抵の人からは、「うらやましい！オーロラ綺麗だった？」(オーロラはアイルランドじゃなくてアイスランド。)、**「へー！スコットランドいいね！」**(いや、アイルランドだってば!)といった反応が返ってくる。

このように日本では影の薄いアイルランドだが、海外では『皆いつもお酒を飲んで酔っ払っている陽気な国』というイメージが強い。そしてこのイメージは正解で、アイルランドに住む人々は平日・休日お構いなくパブでお酒を飲むことが

大好きである。

私の住んでいたダブリンは首都ということもあり、テンプルバーという歴史的な老舗パブから、最近話題の LGBT が集うパブまであるので、飲み歩きで退屈することはない。私自身も、ダブリンで生活するうちに「パブでお酒を飲むこと」は留学生活においてなくてはならないルーティンとなっていた。しかし、私は単にビールをたくさん飲んではいやいでいたわけではなく、自分自身の英語力を試すためにパブに通っていたのだ。毎週月曜日と水曜日には都市部にあるパブに通い、勉強や就労のためにアイルランドに来ている外国人同士が英語で交流するミートアップに参加した。また、火曜日には Japanese Society の活動のひとつとして行きつけのパブで現地のおじさん・おばさんと共に盃を交わした。木曜日には大学のすぐ近くにあるスポーツパブで行われる日本人と日本に興味があるアイルランド人とのミートアップに皆勤賞並みに通った。さらに、毎週土曜日には都市部にある図書館で日英語間のランゲージエクステンションをする会に参加して、その後そこで知り合った友人とパブへ繰り出すことも少なくなかった。つまり多い時は週に 5 日間パブに通っていたということである。

大学という枠組みを飛び出しパブに通った大きな理由は、「国際交流」というある種の義務感から解放されて、自然体の自分で人々と接することができたからである。ケルト音楽の生演奏をバックに、ギネスビールを飲みながら話す内容は他愛もなかったかもしれないが、楽しみながら能動的に英語で自分を表現するという感覚を掴むには最高の場だった。そして何より国籍関係なく友情を深めることができた。日本に帰ってきた今、あの時の感覚が恋しくて金沢にアイリッシュパブがあればいいのに！と切実に思う日々である。

《私の博士論文》

★博士論文とその後

屈 莉 (H24 年博士号取得)

私は「数量類別詞の類型論の研究-認知言語学からのアプローチ」というタイトルで博士論文を書きました。数量類別詞について研究を始めたきっかけは、「数量類別詞を持つ言語 (e.g. 日本語、中国語 etc.) では単数・複数を区別しない」、「単数・複数を区別する言語 (e.g. 英語) では数量類別詞というカテゴリーが存在しない」という世界の言語に見られる傾向に興味を持ったことです。

数量類別詞がなくても日常の言語活動にさほど支障をきたさないという理由で、数量類別詞は余剰物と思われがちです。しかし、認知言語学の枠組みで数量類別詞を捉え直すことによって、数量類別詞がいくつかの重要な認知機能を果たしていることが明らかになりました。そうした機能としてまず、世界をカテゴリー化するという認知機能が挙げられます。なお、数量類別詞によるカテゴリー化は古典的カテゴリー観では到底捉えることのできないスキーマ、プロトタイプ、インスタンスからなるファジーかつ主観的なものです。次に、そうした機能として数える対象を個体として認識できるように有界化するという認知機能も挙げられます。言い換えれば、マトリックスの中から一つのドメインだけをプロファイルするということです。例えば「三本の木」のような表現では、「三本」が木を認識する際の参照点の機能を担っています。さらに、数量類別詞が持つ機能は参照点機能からグラウンド化機能へと連続しており、家族的類似のカテゴリーを成していると考えられることもできます。そのほかに、〈単数・複数を区別する言語〉(e.g. 英語) は D モードで、〈数量類別詞を持つ言語〉(e.g. 日本語、中国語 etc.) は I モードで

ものを概念化しており、〈単数・複数の区別〉は客観性の高い言語に多く見られ、〈数量類別詞〉は主観性の高い言語に多く見られるのではないかと考えられます。認知言語学のアプローチで類型論的に類別詞を分析することによって、二つの重要なことを発見することができました。一つは、世界の言語には数えることに関するカテゴリーを言語に組み込んでいる言語と組み込んでいない言語があるということです。もう一つは、名詞をモノとして概念化する際、すでに境界のあるモノと境界のないモノに分けている言語と、はなから境界を考慮に入れない言語があるということです。

博士後期課程を修了して、現在私は非常勤講師として英語と中国語の授業を受け持っています。「聞く・話す・読む・書く」という4技能をバランスよく向上させることを根本に据えて、ボトムアッププロセス、形式と意味のマッピング、プロトタイプ・カテゴリー、スキーマ、メタファー、メトニミーなど様々な認知言語学的手法を講義に取り入れています。認知言語学に出会って以来、ことばの根本的な性質を考えることが好きになり、またそういうことを考えることが習慣になりました。これからは先生と仲間感謝しながら、またことばの不思議さと楽しさを味わいながら、研究の道をコツコツと歩んでまいりたいと思っております。

★英語と日本語の比較からみた移動事象の認知把握と移動表現

田中 瑞枝 (H27 年博士号取得)

昨年6月に博士論文を提出し、今年3月に認可を頂いた。振り返ると金沢大学英文科で過ごした6年間は、毎日が映画のように濃厚な時間だった。形となったのは博士論文だが、完成に至るまで授業

や研究室で重ねた仲間との議論や、アメリカでの言語調査、海外での学会発表、何より研究の中で先生方から頂いた数々の言葉は、私に新しい世界の見方を教えてくれた。この時間と空間を過ごせたことが、とてつもなく幸せだったと今身に染みて感じる。

博士論文では、英語と日本語による移動表現を、言語化の基盤となる人間の認知的側面（移動事象の捉え方）から解明することをその目的とし、言語が人間の一般的認知機能を基盤に構築されることを重点に置く言語理論—認知文法—に基づき記述を行った。考察の特徴としては、表現の現在形のみならず通時的変遷を辿ることで、複数の個別の表現が実は時間の経過の中で変化した連続体であり、包括的な説明を与えることを可能とした。例えば、英語の移動表現において経路を含意する典型的語彙である *to* は、“In this picture, Diana is standing to my left”. (Tyler and Evans 2003:150) のような用法を持ち、「位置の用法」という個別の用法として扱われることが多かったが、通時的変遷を鑑みるとこれも *to* の本質（本論では「離れた二者間の心的走査」とした）に含まれる。寧ろ、*to* には古くより位置的と言える用法があった (e.g. “Stayed to Canfileds all night”. (OED) では *at* のように働く) が、本質にそぐわないこの用法は衰退してしまった。日本語の移動表現においても、その核となる着点を表す空間辞—「に」、「へ」、「まで」—とその周辺の空間辞について通時的に分析した。また、英語の移動表現には語彙が経路を含意する語彙主導の他に、構文全体が経路を想起させる構文主導が存在し、英語の持つ強い到達点指向 (Ikegami (1981)) 性が構文主導の支えとなると主張した。また、「に」、「へ」、「to」の考察では、主観的から客観的事象把握への認知的移行が通時的な意味拡張を推し進めている一方で、英語に比べ

日本語では主観的事象把握をより強く保持する傾向があると論じた。

個人的なことだが、今年 7 月に子供を出産し、現在は初めての育児に奮闘している。ほとんど目の見えない状態で生まれてくる赤ちゃんが、たった 2 ヶ月でぬいぐるみの顔を認識し笑いかけ、話しかけるといふ状況に直面し、人間の不思議に一層魅かされている。

★博士論文奮闘記

高島 彬 (D3)

僕には素晴らしい業績があるわけでもなく、また自慢できるほどの体験もおそらくない。したがって、僕の博士課程の経験をそのまま「博士論文奮闘記」として書くのはつまらないだろう。しかし、自分の外で起きた出来事のみが全てではないと僕は思う。おそらく自分の中で起きた様々な葛藤、これもまた「奮闘記」であり、むしろこの内面の「奮闘記」の方が壮絶で、劇的であると思う。今回、そんな「奮闘記」を書いてみようと思う。ただ、ひどく抽象的になり過ぎる可能性があるので、イメージーションを加えよう。そう、僕の「博士論文奮闘記」を一言で例えるならまさに「パンドラの箱」だ。

僕は 3 年前に金沢大学博士課程に入学した。入学する前は、ちゃんとやっていけるのか不安で、合格の知らせを受けても入学しようか迷っていた。僕は昔から勉強が出来る方ではなかったし、思い返してみても他人から何かしらの才能があると言われた記憶もない。凡人のプロトタイプのような人間だ。それでも、入学を決めたのは、認知言語学が好きで、博士課程には何があるのだろうという「好奇心」のためであったと思う。ギリシャ神話の中でも有名な物語の一つである

「パンドラの箱」。その物語に登場するパンドラが絶対に開けてはいけないと言われていた箱を開けてしまったのもゼウスがパンドラに「好奇心」を与えたためだという。僕に「好奇心」を与えたのはゼウスではないのだが、とにかく僕はパンドラの箱を開けてしまったのだ。神話では様々な災いが飛び出すのだが、僕に降りかかったのは自分への不満と失望である。何をしてもうまくいかない、なぜこんなにも自分は出来が悪いのか。そして、苛立ち、周りを見ては妬む。多くの人に迷惑をかけたと思い、申し訳なく思う。そんな自分にまた失望する。完全に負のスパイラルである。それでも、僕をここまで連れて来てくれたのは、博士課程に進む道を示し、僕に「好奇心」を与えてくれた先生の言葉である。「研究者にとって、大事ななのは自分のやっていることが本当に好きかどうかということ」。自分の現状に対する不満や失望はあるが、常に本当に好きなことを続けているという自覚はある。自分の「興味」。僕にとって、これがパンドラの箱に残っていた「希望」なのだが、この「希望」の解釈には諸説ある。「希望が手元に残った」と解釈するとどこか楽観的な印象を受けるが、一方で最後に「希望」も解放され、人間はその「希望」があるため未来がわからず諦めることができなくなった。つまり、「希望」とは最後に解放された最も恐ろしい災いであるという解釈もある。そう、僕の「希望」もやはり恐ろしい災いなのだろう。しかし、僕はこの災いを捨てることはない。この災いは僕を失望させ、苦しめるが、同時に活力と感動を与えてくれる。「興味」という名の「希望」に支配され、翻弄されながら、奮闘し続ける。これが僕の「奮闘記」である。

《平成26年度卒業論文題目》

上出 佳代 An Analysis of Purity of
Tess

嶋田 瑛子 A Study on the Use of
Personal Pronouns *We* and *You*

《在学生の状況》

＜学生数＞

2年生 16名（男性7名、女性9名）
3年生 10名（男性4名、女性6名）
4年生 25名（男性7名、女性18名）
院生
修士課程 7名（男性3名、女性4名）
博士課程 5名（男性3名、女性2名）

＜過去3年間の長期留学先＞

シェフィールド大学、セントラル・ラン
カシャー大学（英国）、ダブリンシティ大
学（アイルランド）、ウイリアム アンド
メアリー大学（米国）、ユバスキュラ大学
（フィンランド）、ゲント大学（ベルギー）、
カレル大学（チェコ）

最近の留学傾向としては、英語圏の大学だけでなく、英語プログラムを提供している英語圏以外の大学への留学を希望する学生も増えてきました。

＜過去3年間の主な就職先・進学先＞

石川県教員、富山県教員、石川県庁、金
沢市役所、金沢大学職員、北陸銀行、北
國新聞、新星出版、ユニクロ、その他民
間企業など

金沢大学大学院、京都大学大学院など

最近は、やはり公務員志望の学生が多いです。今年は就職活動の期間が例年に比べ長引きましたが、就職状況は全体的に良かったようです。

＜平成26、27年度の学会発表等＞

◆平成26年度 学会発表

・日本言語学会第148回大会
（6月7-8日：法政大学）
高島 彬「ガ格テアル構文を動機づける「発見性」について」

・日本認知言語学会第15回全国大会
（9月20-21日：慶應義塾大学日吉キャンパス）
ワークショップ：高島 彬・小林 隆・向井
理恵・中谷 博美「文構造を Anchoring
Structure で捉える」

・日本英文学会中部支部第66回大会
（10月14日：中京大学）
小林 隆 「認知言語学におけるプロファイル（profile）の概念に関する一考察—指示代名詞 *this* と *that* を例にして」
高島 彬 「英語と日本語における被動作主焦点化の認知プロセスについて」
中谷 博美 「付加疑問文の極性について—間主観性と認知文法の視点から」
廣田 篤 「No more A than B 構文の認知意味論—クジラ構文の意味と認知」
向井 理恵 「英語と日本語の語りをグラウンディングの観点から考える」

◆平成26年度 論文

・日本認知言語学会論文集第14巻
小林 隆 「談話標識 *I mean* の使用原理についての認知言語学的考察」
田中 瑞枝 「格助詞「に」の多義性に関する認知的考察—通時的考察を基盤に」

・日本英文学会中部支部第65回大会
Proceedings
小林 隆 「談話標識 *I mean* における認知語用論のプロセス」

田中 瑞枝 「移動事象の把握と移動表現上の経路の明示について 認知的アプローチによる一考察」

・北海道英語英文学第 58 号

高島 彬 「英語の be-Ving と日本語の V テイルについて—「始まり志向」の継続相と「終わり志向」の継続相について」

◆平成 27 年度 研究発表

・Language, Cognition and Society (AFLiCO-6)

(May 26-28: Grenoble, France)

Nakatani, Hiromi

“The Parallelism of Tag Questions in English and Ending Particles in Japanese”

・The 13th International Cognitive Linguistics Conference

(July 20-25: Newcastle, UK)

Nakatani, Hiromi and Akira Takashima

“The Core-Final Structure: the Parallelism of Tag Questions in English and Ending Particles Sentences in Japanese”

・日本認知言語学会第 16 回全国大会

(9 月 12-13 日:同志社大学今出川キャンパス)

高島 彬 「日本語のモダリティと実在性に関して—「そうだ」における「様態」と「伝聞」—」

中谷 博美・屈 莉 「語気詞と反復疑問文の認知的考察—中国語・英語・日本語の機能的構造分析による言語類型—」

・日本英文学会中部支部第 67 回大会

(10 月 17 日:名古屋工業大学)

向井 理恵 「日本語と英語のテキストと語り～「同化」と「異化」の観点から～」

◆平成 27 年度 論文

・日本認知言語学会論文集第 15 巻

小林 隆 「I mean の機能的構造を Anchoring Structure で捉える—主節としての用法からフィラーの用法まで—」

高島 彬 「Anchoring Structure について—倒置 (Inversion) の認知的動機づけについて—」

中谷 博美 「付加疑問文の Anchoring Structure による構造分析」

向井 理恵 「日本語の anchoring structure と文末の機能について」

田中 瑞枝 「Anchoring Structure の可能性」

・日本英文学会中部支部第 66 回大会

Proceedings

小林 隆 「認知言語学におけるプロファイル (profile) の概念に関する一考察—指示代名詞 this と that を例にして」

高島 彬 「英語と日本語における被動作主焦点化の認知プロセスについて」

中谷 博美 「付加疑問文の極性について—間主観性と認知文法の視点から」

廣田 篤 「No more A than B 構文の認知意味論—クジラ構文の意味と認知」

向井 理恵 「英語と日本語の語りをグラウンディングの観点から考える」

・人間社会環境研究 第 30 号

高島 彬 「日本語テアル構文の文法化のプロセスについて—「ガ格テアル構文」から「ヲ格テアル構文」へ—」

中谷 博美 「付加疑問文の構造の認知的分析」

廣田 篤 「No more A than B 構文の認知言語学的・語用論的分析」

《 2014 年度会計報告 》

以下の会計報告は、11 月の総会に諮られます。

2014 年度金沢大学英文学会会計報告

(2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日)

会計 正木恵美
会計監査 西多喜代子

収入	2,519,269 円
(内 前年繰越金	2,039,820 円)
支出	233,225 円
2015 年度への繰越	2,286,044 円
<hr/>	
【収入内訳】	(円)
2014 年度 KES 会費	
(在学学生分、総会時支払分、振込分)	
	210,000
維持費	161,000
懇親会費	108,000
利子	449
<hr/>	
小計	479,449
2013 年度繰越	2,039,820
<hr/>	
合計	2,519,269

【支出内訳】	(円)
ニューズレター発送関連	78,087
2014 年度総会関係	
お茶代・花代・備品	10,030
懇親会費	145,000
備品(会計用ノート)	108
<hr/>	
合計	233,225

《 事務局より 》

1. 会費の納入について

同封の振込用紙にて、2015 年度会費 2,000 円の納入をお願い致します。ぜひ、会費と共に維持費(一口 2,000 円)もよろしくお願い致します。

これまでご納入頂いてない方も、当学会の運営状況をご理解の上、何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

○会費・維持費等の振込先：

ゆうちょ銀行

口座記号：00720-6

口座番号：16171

加入者名：金沢大学英文学会

2. 総会、懇親会の出欠について

同封の葉書(S55年卒までの方に同封)、または E メールにて、総会及び懇親会の出欠を 11 月 23 日(月)までに事務局までお知らせ下さい。その際には、ご氏名(旧姓)、卒業(修了)年、ご住所、(お葉書の方は)メールアドレスをご記入願います。また、ご近況もぜひお書き添下さい。頂いたお葉書(メール)は、大事に保管し、総会時に閲覧できるよう受付に置いておきます。どうぞよろしくお願い致します。

*市内のホテルが取りにくくなっております。金沢大学のゲストハウスにまだ空きがあります(10月26日現在)ので、ご希望の場合は、事務局までメールでご連絡ください。(予約は外部からはできません。シングル 3100 円～)詳細は以下のサイトにて。
<http://guesthouse.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

3. KES29 号について

次号 KES29 号に関しまして、今年度中に発刊予定で、準備を進めております。

4. メール会員登録のお願い

メール会員を募集致します。メール会員の方には、ニューズレター、研究会や同窓会などのお知らせを、いち早くご連絡させていただきます。ご希望の方は、ご連絡先のメールアドレスを金沢大学英文学会事務局までお知らせください。

【ご連絡先】 金沢大学英文学会事務局
E-mail :kesoffice.kanazawa@gmail.com

◆総会プログラム・ニューズレター発送にあたり、住所(転居先)不明の方が増えてきております。住所変更等ありましたら、お手数ですが、事務局までご連絡下さい。

【物故会員】

井崎宏一先生、村井勉様（S38年卒）、
 亀田紀子様（S39年卒）、下畑吉彦様
 （S40年卒）、野島研己様（S46年卒）
 （*事務局にご連絡頂きました皆様です。）

長年にわたる本学会へのご支援に感謝申
 上げますと共に、ご冥福を心よりお祈
 り申し上げます。

◆金沢大学英文学会役員

会長	中村芳久
副会長	谷内輝雄
事務局	堀田優子・川島嘉美
会計	正木恵美・屈莉
監査	西多喜代子
将来計画委員	高田茂樹、和泉邦子他
KES 編集委員	堀田優子他
広報委員	柳川三千代
運営委員	柿崎謙一、市川泰弘、 小林隆

院生委員

高島彬、向井理恵、中谷博美、
 廣田篤、西門綾子、村澤佑介、
 茶谷丹午、長谷川あおい、藤井志帆、
 山田美紀、石垣恵一

《 編集後記 》

会員の皆さま、いかがお過ごしでしょ
 うか？ NewsLetter 第 7 号をお届けいた
 します。

卒業生の皆様、近況のご報告をありが
 とうございました。

また、これまで留学先からのご報告や
 素敵な写真をたくさんいただきました。
 お気づきの方もいらっしゃるかと思いま
 す。ホームページの方にも、その都度
 更新させていただいておりますので、ご
 覧いただけると嬉しいです。

今年は、北陸新幹線も開通し、金沢は
 観光都市として大変にぎわっていますね。
 晩秋の金沢でまた皆様にお会いできるこ
 と楽しみにしています。

今年の総会では、シンポジウム「英文
 科のこれから」を予定していますが、大
 学のグローバル化の中で、また人文社会
 科学が「軽視」される中で、60 数年の歴
 史を誇る我が英文科、我が金沢大学英文
 学会は、いかなる方向に進むべきか、ど
 のような社会貢献を目指すべきか、若
 い？パネリストのお二人の最近のご研究
 の状況とご意見をもとに、大いに語り合
 いたいと思います。

今回は特別に、金沢大学長の山崎光悦
 先生にご参加いただき、おことばをいた
 だくことになっております。多くの皆様
 のご参加をお待ちしております。

(柳川)



ハーヴァード大学の卒業式の風景

*詳しくは、里見先生の「ボストン2カ月・パリ10カ月滞在記」(4ページ)を参照



エッフェル塔

(写真：里見繁美先生)

金沢大学英文学会ニューズレター No. 7

2015年11月1日発行

〒920-1192 金沢市角間町

金沢大学人文学類 英語学英米文学研究室

金沢大学英文学会

代表者 中村 芳久

E-mail : kesoffice.kanazawa@gmail.com

URL : <http://english.w3.kanazawa-u.ac.jp/>